

◎自由発表（第3会場）【座長・司会】胡田 裕教（関西地区研究会常任幹事）

【演 題 等】「課題予防的生徒指導の充実を目指した研究」

～日常的な心の可視化から非認知能力育成へのつながりを意識して～

【講演・発表者】岩出市立根来小学校 教諭 森脇 拓也

・発表概要

「子どもたちの発信する問題行動やSOSは、非認知能力の育成により、自ら乗り越えていけるようになるのではないか。」という仮説のもと、「課題予防的生徒指導」の充実を図ることを通して、児童の非認知能力の育成を目指した。

手立てとしては、(1)子どもの「心の状態を日常的に可視化」、(2)「児童の非認知能力の把握・育成」、(3)生徒指導部会の役割の再整理を行った。結果、悩みを抱える児童の早期発見・対応を進めることができた。また、非認知能力の指標を設けたことで、評価基準が明確になり、教員が多角的な視点で児童を見つめ直すきっかけになった。生徒指導部会が、教員間の情報共有を促進し、学年間の指導のずれを調整する機能を果たすことができるようになった。

・発表要旨

(1) 子どもの「心の状態を日常的に可視化」

teams のリフレクトの機能を活用し、学級に応じて紙媒体かタブレットを選択し、毎朝心の状態を可視化した。teams のリフレクトは5種類の表情のアイコンがあり、ボタンを押すと「安心している」

「自信があります」といった具体的な感情を選択できる。結果、担任による日々の主観的な見取りだけではなく客観的な見取りが可能となり、悩みを抱える児童の早期発見・対応を進めることができた。

(2) 「児童の非認知能力の把握・育成」

作成した17個の項目を日常的に指導すると共に、児童にアンケートをとり、児童が自身の非認知能力をどのように捉えているかを把握し、その児童に合った指導を進めていった。結果、児童のどのような姿を見取るのかを担当が具体的に想像できるようになり、担任それぞれに学級経営力の向上が見られた。特に「困っていることを人に相談できる」、「相手を知るために色々な人と話す」、「失敗を恐れず挑戦できる」、「失敗しても気持ちを切り替えられる」、「怒りの気持ちを抑えられる」といった項目を重点的に見ていき、これらが苦手な児童の能力を伸ばす環境を作ることで、学級全体が落ち着くのではないかと考える。

(3) 生徒指導部会の役割の再整理

担任一人で抱え込んでしまわないように、月一回の部会で各学年の状態を共有し、指導のあり方について相談できる環境をつくった。結果、学校全体の生徒指導に関わる情報が共有され、指導の方向が統一されやすくなった。また、配慮の必要な児童についても共有することで、どのような指導を進めるのかを検討することができた。さらに、特に若手の先生方にとって、情報共有や学びの場となっている。

(4) 本研究の考察

心の状態を可視化したデータや質問紙は児童によって表出の仕方は様々である。だからこそ数値にだけ頼るのではなく、その情報を活用しつつ、教員として児童理解の力を高め、児童の非認知能力の育成を図っていくことが重要であると考えられる。



また、児童が自信を持てていない非認知能力を把握し指導することで、その児童が今後同じような課題に直面した時に自ら乗り越える力を育成することができる可能性も見い出すことができた。

・質疑応答の概要

Q 低学年、中学年、高学年で、紙媒体とタブレットという手法の違いや、出てくる結果に何か特徴的な違いはあったか。

A 紙媒体とタブレットの手法の違いについては、高学年であってもタブレット操作に慣れていない段階では、朝の忙しい時間の中で操作することが負担になるケースが見られた。そのため、現状では3年生以下は基本的に紙媒体を使用し、高学年でも学級の実態に応じて紙媒体も活用している。

出てきた内容の違いについては、高学年になると友人関係や受験、進路といった悩みが多く見られる。中学年では、もう少し身近な「遊びたいのに宿題をやらなければいけない」といった悩みが多く、低学年では、家庭のことよりも「今日はこれが楽しみ」といったポジティブな内容や、「友達にこんなことを言われて嫌だった」という素直な気持ちが表れやすい傾向があった。